

地元の歴史を知ろう

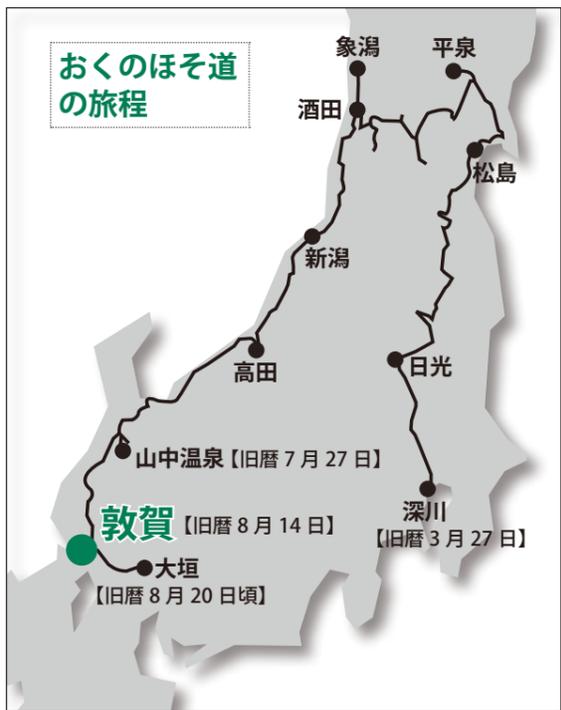
「おくのほそ道」

芭蕉が旅した敦賀

「月日は百代の過客にして・・・」から始まる、松尾芭蕉が著した紀行本「おくのほそ道」。長い旅路の終わり頃に、芭蕉は、敦賀の地を訪れました。芭蕉は敦賀のどこを訪れ、どんな句を詠んだのか。「ほそ道」に描かれた敦賀での旅路を紹介します。

敦賀までの道のり

「おくのほそ道」の旅が始まったのは、今から320年前の、元禄2年3月27日(陽暦5月16日)。芭蕉は、弟子の河合曾良とともに、東北・北陸への長い旅に出ました。江戸の深川を出発した二人は、街道の整備も十分でない奥州を巡り、夏の暑さに苦しみながら日本海側を南下。7月27日に、山中温泉に到着しました。山中温泉では、お腹をこわしていた曾良が、ひとり伊勢へと旅立つことに。二人は、別々に旅を続けることになりました。その後、芭蕉は福井で古い友人の神戸等(洞哉)と合流。等宅に泊した後、(中秋の名月を前にして)「名月はつるがのみなどに」と、等宅とともに福井を発ちました。



松尾芭蕉銅像 (氣比神宮境内)

1689年8月14日 (陽暦9月27日)



8月14日晚、敦賀着 出雲屋に泊まる

芭蕉と等裁は、8月14日(陽暦9月27日)の夕暮れ、敦賀に着きました。宿は、唐仁橋町(現・相生町)の出雲屋という旅館です。その夜は、月が清らかに輝いていました。福井を発ったときから、敦賀での観月を楽しみにしていた芭蕉は、宿の主人に尋ねました。「中秋の名月にあたる明日の夜も、このように晴れるでしょうか」。

すると主人は「天気が変わりやすいのが北陸の常です。明日の夜が、曇るか晴れるかは予測が

氣比神宮で お砂持ちの話聞く

つきません」と答え、芭蕉に酒をすすめました。

外は小望の月あかり。主人の案内で芭蕉は氣比神宮に向かいました。神前の白い砂は月の光に照らされ、霜を敷いたようです。そこで主人は、氣比神宮に伝わる「お砂持ち神事」について、芭蕉に話しました。

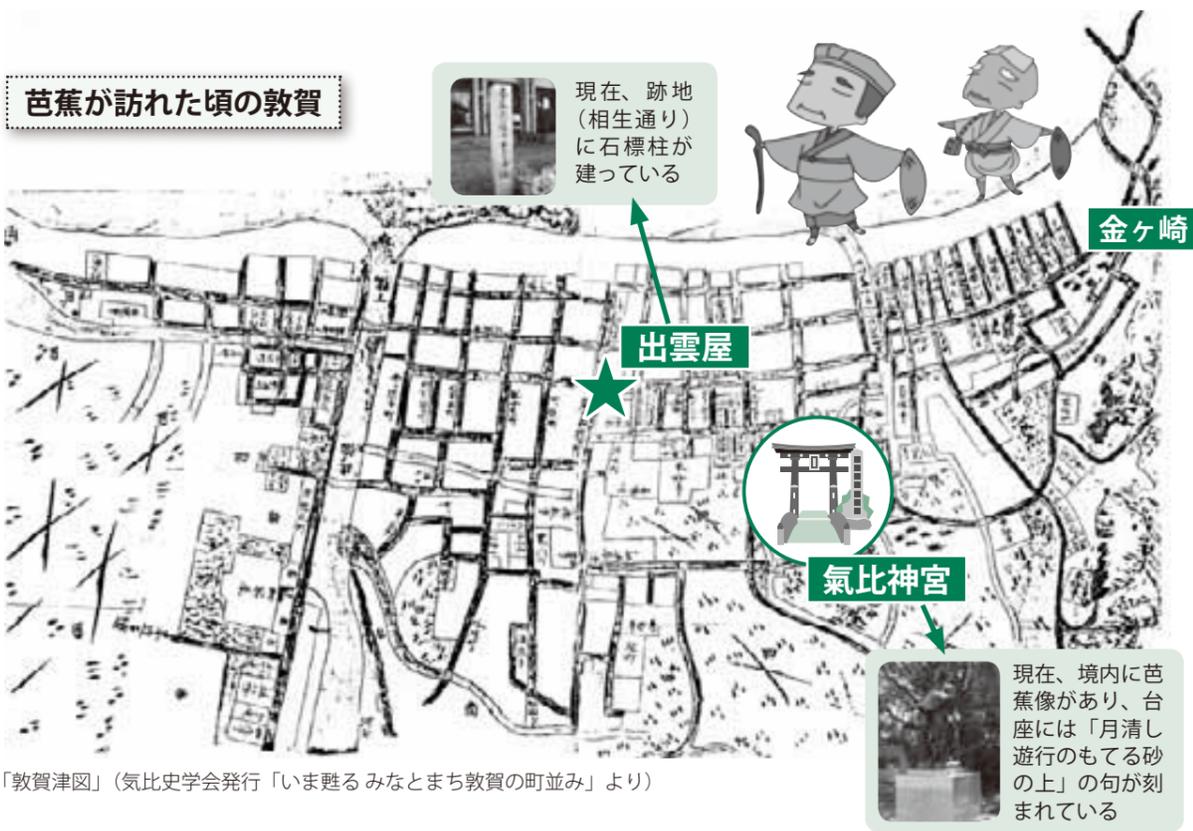
「その昔、敦賀を訪れた遊行二世の上人は、ぬかるんだ参道を見て、人々がお参りしやすいよう、自ら草を刈り、土石を運んで沼地を埋めためました。その故事にならい、今も代々の遊行上人が敦賀を訪れ、神前に砂を運ばれる。これを遊行のお砂持ちと呼んでいます」。

この話に心動かされた芭蕉は、次の句を詠みました。

月清し 遊行のもてる 砂の上

・・・十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ。その夜、月殊晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒す、められて、けいの明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木の間にも月のもり入たる、おまへの白砂、霜を敷るがごとし。往昔、遊行二世の上人、大願発起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷ひ、泥濘をかはかせて、参詣往來の煩なし。古例、今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主のかたりける。月清し遊行のもてる砂の上 「おくのほそ道」より

芭蕉が訪れた頃の敦賀



「敦賀津図」(氣比史学会発行「いま甦るみなとまち敦賀の町並み」より)



### 8月15日、雨

翌日の8月15日、宿の主人が言ったとおり、雨が降りました。そして芭蕉は、次の句を残しました。

名月や

北国日和

定なき



十五日、亭主の詞にたがはず、雨降る。

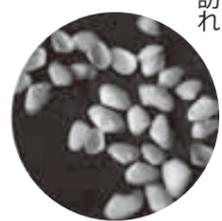
名月や北国日和定なき  
十六日、空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の浜に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠・小竹筒などこまやかにした、めさせ、僕あまた舟にのりせて、追風時のまに吹着ぬ。浜はわづかなる海土の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあため、夕ぐれのさびしさ、感に堪たり。  
寂しさや須磨にかちたる浜の秋  
波の間や小貝にまじる秋の塵  
其日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。  
露通も此みなどまで出むかひて、みの、国へと伴ふ。…  
「おくのほそ道」より

### 8月16日、色ヶ浜へ向かう

16日は空が晴れたので、ほの小貝を拾おうと思ひ、種(色ヶ浜)に舟で向かいました。芭蕉のために、地元の俳人・天屋玄流が心配りも細やかに、弁当や酒などを用意し、大勢の雇い人を舟に乗せました。舟は追い風を受け、わずかの時間で色ヶ浜に到着しました。

※ますほの小貝

赤みを帯びた小さな貝。西行法師の古歌にも出てくる。芭蕉は西行に憧れ、ますほの小貝のある色ヶ浜を訪れたのである。



### 夕暮れの閑寂さに心打たれる

浜には、漁師の小さな家と、侘しい法華宗の寺(色ヶ浜にある本隆寺のこと)があるばかりでした。芭蕉はこの寺で、茶を飲

み、酒を温めましたが、夕暮れの寂しさは、いやおうもなく、心を震わせます。

この閑寂さに心を打たれた芭蕉は、源氏物語に描かれ寂しい景色の代名詞と考えられていた「須磨の秋」の寂しさを思い、次の句を詠みみました。

寂しさや

須磨にかちたる

浜の秋



現在、本隆寺境内と、寺から少し離れた開山堂に句碑がある

また芭蕉は、ますほの小貝や、こぼれる秋の美しさに次の句も詠みみました。

波の間や

小貝にまじる

萩の塵



芭蕉は、その日のあらましを等裁に書かせ、寺に残しました。その後、弟子の露通(路通)が敦賀まで迎えにきて、芭蕉は美濃の国(岐阜県)へと旅立ちました…。

学芸員から見た芭蕉の旅

# 「おくのほそ道」とつるが



芭蕉は約五カ月に及ぶ長い旅の、最後の数日を敦賀で過ごしました。

中秋の名月を待ちながら、遊行上人の故事に心をふるわせ、月のない夜にも興じて句をつくり、また西行ゆかりの憧れの地に立って、秋の夕ぐれの寂しさを嘯みしめる。

『おくのほそ道』の敦賀のくだりからは、敦賀滞在を満喫する芭蕉の心の動きが伝わってくるようです。この旅は、芭蕉が新たな俳諧の境地を求めた旅でもありました。長く苦しい旅の最後にあつて、軽やかに、叙情豊かに描かれた一節が持つ味わいは、物語に一層の深まりをもたらしています。

芭蕉は敦賀に杖と笠を残し、多くの弟子が待つ結びの地・大垣に帰りつきます。大垣はまた新たな旅立ちの地でもありました。『おくのほそ道』に掲載された芭蕉の五十句のうち、敦賀で詠まれた発句は四句ですが、敦賀の句は他にも伝えられています。

「小秋ちれますほの小貝小盃」は市民の皆さんにもよく親しまれています。また、月を主題にした句が多いことも知られています。福井に住む古い友人の神戸等裁(洞哉)

と敦賀に向けての旅立ちに「名月の見所問ん旅寝せむ」と詠んだのを初めに、福井か

ら敦賀までの旅と、敦賀滞在の間に月の句を残しました。

中秋の名月は古来、文人にとって重要な作品作りのテーマです。名月を心待ちにしていた芭蕉ですが、『おくのほそ道』にあるとおり、十五日の夜は雨。それもまたよしとばかりに、「雨に降られた敦賀の月を詠み、特に「月いつく鐘ハ沈める海の底」は、後の敦賀の俳人たちに愛されました。

『おくのほそ道』の決定版として知られる素龍清書本(重要文化財)が長く敦賀に伝えられてきたのも、また不思議な縁です。芭蕉が推敲を重ねた本文を能書家の柏木素龍が清書したもので、芭蕉は最後の旅にも持ち参っています。芭蕉の没後、めぐりめぐって敦賀の俳人白崎琴路に渡り、その後、縁戚であった新道野の西村家に伝わったのです。この清書本が元禄七年に書き上げられてから三百十五年。元禄二年の敦賀の月は、不朽の名作『おくのほそ道』の中で今も生き生きと輝いています。そしてこれから千の年も、多くの人に読み継がれることでしょう。

市立博物館学芸員  
高早恵美

◆奥の細道サミットって?◆

松尾芭蕉の「奥の細道」にゆかりのある自治体・団体の関係者が集まる会議。昭和63年に始まり、毎年、場所を変えて開催。敦賀での開催は初めて。



市立博物館企画展

『おくのほそ道』と敦賀

9月12日(土)～10月12日(月)

開館時間 10:00～17:00

※休館日 9月14・24・28・10月5日

「奥の細道」敦賀サミットにあわせて、博物館では企画展を開催します。市民の皆さんもぜひ『おくのほそ道』に描かれたふるさとの魅力に親しんでください。

またサミット開催を記念して、博物館2階の一面に、12月3日から待望の『おくのほそ道』常設展示コーナーをオープンします。

特別公開!  
(10/2～10/12)

そりょうせいしょほん  
素龍清書本



【国指定重要文化財】

芭蕉が友人の柏木素龍に清書を依頼した本。表紙に貼った題せんは、芭蕉が「おくのほそ道」と自筆した。芭蕉の没後、敦賀の俳人・白崎琴路をへて、新道野の西村家に伝わった。

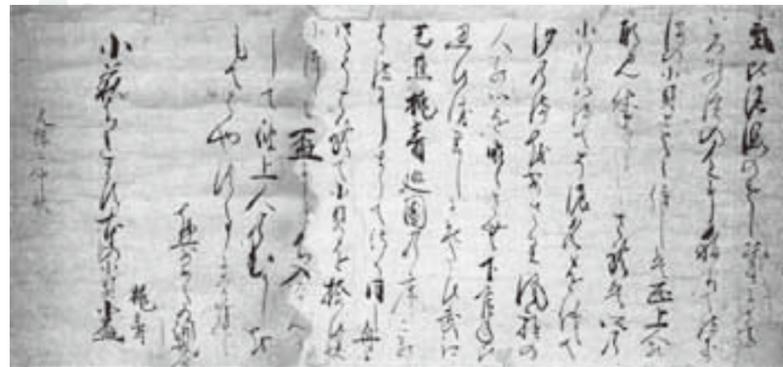
竹杖(松尾芭蕉所用)

【市指定文化財】

おくのほそ道の旅で芭蕉が出雲屋に残した杖



松尾芭蕉色ヶ浜遊記【市指定文化財】



おくのほそ道に「其日のあらし等裁に筆をとらせて寺に残す」とあるのがこの遊記。「小萩ちれすほの小貝小盃」の句が記されている。



記念講演 『敦賀への道—曾良旅日記から考える—』

10月3日(土) 13:30～15:00

■ところ プラザ萬象小ホール

■入場料 無料

曾良と別れた芭蕉がはたしてどの道をとって敦賀へ行ったのか、今庄から山中峠の可能性を探っていきます。また、元禄2年当時の芭蕉は有名だったのかどうか、『曾良旅日記』には何故距離を書いている日と書いていない日があるのか、曾良は本当に「腹を病んで」いたのか等々の話題を取り上げます。



講師 かなもり あつこ  
金森 敦子氏

profile

作家。新潟県生まれ。主な著書に、『江戸の女俳諧師「奥の細道」を行く—諸九尼の生涯—』(江戸エッセイスト・クラブ賞受賞)、『芭蕉「奥の細道」の旅』など

★問合せ 文化振興課 ☎22-8152



「奥の細道」つるが芭蕉紀行  
全国俳句大会

10月3日(土) 9:30～17:00

名月に思いを巡らせながら、芭蕉の杖跡をたどってみませんか。【事前申込必要】

■受付場所 プラザ萬象

受付時に投句用紙を配布します。

■定員 100人

■参加料 1,000円(投句料・1人2句まで)

■詳細日程

9:30～10:00 受付

10:00～12:00 吟行会(バスで色ヶ浜、西福寺に向かいます)

13:30～15:00 記念講演(上記の講演と同じ)

15:00～17:00 俳句大会(事前投句・当日当句の入賞者表彰など)

★問合せ・申込先 港都つるが株式会社 ☎20-0015



「奥の細道」つるが芭蕉紀行  
芭蕉探訪ウォーク

10月4日(日) 受付 9:00～  
出発式 10:00～

芭蕉ゆかりの史跡を巡ります。郷土の歴史を肌で感じながら、健康増進を図りましょう。

■対象者 健康な方ならどなたでも  
(小学生の方は保護者同伴)

■参加料 500円(中学生以下無料)

■受付場所 金ヶ崎緑地(当日受付も可能です)

■コース

①ファミリーコース(5km)

金ヶ崎緑地～金前寺～氣比神宮～敦賀駅～相生商店街～金ヶ崎緑地

②芭蕉杖措きコース(10km)

金ヶ崎緑地～金前寺～氣比神宮～相生町商店街～博物館通り～川崎通り～氣比の松原～花城～関加川～金ヶ崎緑地

★問合せ 港都つるが株式会社 ☎20-0015